

横浜歌人会 会報 120*

横浜歌人会会報 第120号

目次

●特集1≫ 観月会

- * 02 報告… 津波古勝子／三枝むつみ／宮下俊博
- * 03 詠草

●特集2≫ 新春歌会

- * 06 報告… 河北笑子／桜井健司
- * 07 詠草

* 04 会員作品

朝井恭子／池谷しげみ／大沢優子／川井怜子／小島熱子／佐久間佐紀
柴田昌子／柴原明美／正古誠子／鈴木和子／関口満津子／千田政子
長野道子／中村泰子／間 ルリ／堀部知子／林 静峰

* 08 会員作品

結城千賀子／山下成代／山田道恵／吉野裕之／渡辺 謙

* 08 編集後記

特集1 観月会

—— 歌会・懇親会

〔日時〕二〇一八年十月二十一日（日） 14:00～19:00

〔会場〕東天紅横浜桜木町ワシントンホテル店（横浜市中区）

●十三夜の月——津波古勝子

しつとりとした山葵色の江戸小紋に流星を幻想させる銀の幾何学模様をあしらった白地の帯を纏う野一色容子氏の歯切れのいい司会で、十月二十一日（日）の観月歌会は終始和やかに進められた。

詠草三十一首、欠席六名、出席二十五名の中高年歌会である。若い人たちは？ 今日は一瞬の寂寥。

作品も「君逝きて／病む胸／発熱／父の柩／車椅子／検診」と前半十六首中六首もトーンの低い歌が目立つ。第二評者は、後藤恵市、高橋みずほ、三枝むつみ、真鍋正男、朝井恭子の諸氏。隣のグループからの「今日は十三夜」との話題が心を擽る。広辞苑に「旧暦九月十三日の夜。八月十五日の月に対して「後の月」また芋名月に対して豆名月、栗名月といつて月見の行事を行う」とある。因みに昨年は十六夜の月を真鍋氏の大隈カメラのレンズに浮かぶ月影を覗かせていただいた。「横浜歌人会」に相応しく印象的な作品の数々。

父の柩のかなた杉山ぼんやりと背後あかるむ満月らしき

当日を迎えることが出来た。

会場はお馴染みの横浜桜木町ワシントンホテルの東天紅である。準備のため会員の方たちより早めに到着。最上階の二十四階にある東天紅の広間は東と西に大きな窓があり眺めは頗る良い。東側の眼下には二〇一九年に開港一六〇年となる横浜港が見下ろされ、西側の窓には裾野を長くひく富士の姿が見えた。日没後、黒いシルエットとなる富士山も望める筈である。

出席者二十五名はトランプで引いた四つの円卓に座り、先ず歌会である。司会の野一色容子さんのてきぱきとした進行に、歌評も自ずと活発になり意見が多く出され充実した会であった。

歌会のあとはいよいよ月の出を待つ。吉野裕之代表の挨拶に続き小島熱子さんの乾杯の音頭で懇親会が始まった。司会は三枝。オードブル、鱈鱈スープとお料理が進む中、出席の十九名の方々に自己紹介をして頂く。夏の研究会に出席された正古誠子さんと山下成代さんは会員になられ観月会にも出席された。ご縁を嬉しく思う。

月の出の時刻をだいぶ過ぎた頃、建設中のビルの上には月は現れた。クレーンと月、現代的な風景である。中華料理を味わいつつ望遠レンズに月面を眺めるといふ贅沢な観月会も、真鍋正男副代表の挨拶でお開きとなった。

●観月会日記——宮下俊博

横浜駅のホームで、観月会担当の三枝むつみさんと一緒にになり、十二時半前会場に着く。会計の鹿取未放さんが一足先に来ていた。三枝さんは店の担当の方と細かく確認、鹿取さんはお釣り用の千円札など会計の

亜麻色の月を忘れず北海を航く客船のデッキで見たる
乗り換えの駅の段差は覚えたり今日はひとりで行こう、かまくら
まろき肩のぞかせ白きブラウスの少女は月と祭りへの道

ゆるやかに月に寄せゆく雲のあり月容れし縁細く輝く

歌評の交錯した歌にくもの巣の廃家の壁にうつりをりはつかにゆれて
隠沼のやう

月のある空間を去る美しいブレイシーズの背中を見せて
うす雲に光を張って望月はしらじらとしたはるかなる異相があった。

●十三夜の観月会——三枝むつみ

平成最後となる横浜歌人会の観月会は十月二十一日（日）に行われた。毎年、雨天か曇天かと天気予報が気にかかるが、今年は天候に恵まれ気を揉むことなく

確認、私は座席用のトランプを受付と円卓に置く。歌会のみで帰られる方を考慮し四卓に割り振る。突然の欠席の方がいたが、うまくいく。歌会二十五人、懇親会十九人の出席。

歌会の司会は野一色容子さん。第二評者五人は従来通りの割当て評する。第一評者は一首につき二人ずつ。少し戸惑ったが試みとして面白い。結社や個人により様な詠みがあり、私的には、詩として読み取れない歌もあった。印象に残った三首。へ月やある旅のロッジにみんなの果実盛られ濡れぬごとく。下句で降り注ぐ月光の情景が浮かび、腰の句の「みんなみ」により臨場感が増した。なぜか、ゴーギャンの世界がよぎる。へ昼寝より覚めて目に入る半月のたのめなき白 在るはさびしき。頼り気のない日中の半月。昼寝から目が覚めたのだが、まだ眠りの中なのか現なのか錯覚を起こしてしまいそうだ。私（作者）はここに居る。へまるき肩のぞかせ白きブラウスの少女は月と祭りへの道。メルヘンチック。「月と祭りへの道」にそれまでの二十一文字内容が集約されている。月光が、健康的な少女の姿を際立たせている。若さが眩しい。

懇親会は、例年の流れ。夏の研究会に参加した山下成代さんが隣席で話が弾む。正古誠子さんと新しく入会。真鍋正男さんの望遠カメラでクレインの赤い灯の近くの月齢十二・〇の十三夜の月（栗名月）のクレターまではつきりと見える（因みに今日は旧暦九月十三日）。

嵯峨直樹さんと「コミュニティから見る短歌史の生まれる場所」（彼の批評文）、『失われた時を求めて』（プルースト）、『万葉集』などの話が弾み桜木町駅前まで別れる。

一詠 草一——三十一首

いかならむふるさとの海君逝きて鎮め給うや月のし
づくに 注翁長知事逝く 津波古勝子

馬鈴薯の芽を抉りぬる夕つ方二十八夜の月沈みゆく
河北笑子

痛む胸おさへて夜空の月仰ぐ 心筋梗塞にて逝きし
母何処 中村規子

ずつしりと背囊負ふがに今朝もまた中学生が校門め
ざす 平尾 眞

発熱に独り臥す日の窓鳴らし風は問ひゆく「大丈夫
夫？」 朝井恭子

暮れ方の園に咲きいし大輪の芙蓉も見しやのぼり来
る望月 塚田キヌエ

満月を見上げて帰るほろ酔ひも醒め始めたり走友た
ちと 高橋律子

父の柩のかなた杉山ぼんやりと背後あかるむ満月ら
しき 鹿取未放

車椅子に鶴のやうなる身を運び齒切れよき声歌丸師
匠 藤田絹子

お月さま幾つと唄ひし幼き日八十路歩む身露思はざ
り 半澤敏子

くもの巢の廃家の壁にうつりをりはつかにゆれて隠
沼のやう 後藤恵市

月やある旅のロッジにみんなの果実盛られて濡れ
ぬることく 野一色容子

亜麻色の月を忘れず北海を航く客船のデッキで見た
る 土屋美代子

南中の上弦の月やはらかくいつまで舞ふやカウモリ
の影 宮下俊博

月のある空間を去る美しいブレイシーズの背中を見
せて 吉野裕之

健診をクリアすれば安堵して今日からはじまる百歳
への旅 千田政子

昼寝より覚めて目に入る半月のたのめなき白 在る
はさびしき 小島熱子

ひさかたの幾億年の月の色 人の世のわれ米寿を生
きて 高橋庚子

乗り換えの駅の段差は覚えたり今日はひとりで行こ
う、かまくら 荻谷君代

まるき肩のぞかせ白きブラウスの少女は月と祭りへ
の道 田代弥生

冴え冴えと光る月見ゆ災害の街照らしいん灯りとな
りて 原 昌子

古里を離れて既に半世紀皆と集ひて観月したき
下田聰子

野葡萄も実りてをらむ紫の秋をわが身は恋ひつつを
りぬ 小川俊子

昔。薄穂ゆれに月見の団子月のぼるまで傾いてゆく
高橋みずほ

亡き父母と手をつなぎ見し省線の音にまぎれて我を
呼ぶ声 岩井幸代

うす雲に光を張って望月はしらじらとしたはるかな
る異和 嵯峨直樹

夕暮れの空にほんのり円き月西空めざし旅のはじま
り 竹内芳恵

薄雲の懸かれる月にふと想ふ相合傘のふたりのその
後 真鍋正男

映画の場面思ひ大岡川に添ふ干潮ならし護岸黒ずむ
三枝むつみ

ゆるやかに月に寄せゆく雲のあり月容れし縁細く輝
く 正古誠子

迫りたる夕べの薔薇の墨色をみつむることく三日月
の照る 山下成代

■ 会員作品

● 大沢優子

スペインの樹齢五百年とふオリーブのオイルにか
すか草原の匂ふ
アステカの滅ぼされたるその時も若木のオリーブ
うらうら育つか
夥しきヒトが簡略に描かれあり奴隷船にぎつしり
積まれて

● 佐久間佐紀

相思樹の繁る並木の風にゆく術後再びの春の台北
半票ハンビヤオに乗りたるバスに街めぐり花茶に憩ひまう茶芸館
*半票とはシルバー用の半額券
総督府の事務所のドアはノブふたつ上は総督用下
は一般用

● 朝井恭子

「永眠」の文字のふえたるクラス会の名簿を閉じ
てしばし祈りぬ
御やしろの石段見上げ独り言つ「上りは良いよい
下りは怖い」
敗戦を終戦といい水飲みて空腹に耐えしかの八月
よ

● 川井怜子

何食ひて力いだしむその何は何なるや一片氷せいかけほほ
ばる
真青なるいわし手開きいつよりか母に教はる手仕
事ひとつ
菜園の土ふかく掘り魚いその腸わた赤きを捨てつ 夏のゆ
ふぐれ

● 柴田昌子

夫逝きて過ぎたる月日を思いつつ三回忌の経を本
堂に聞く
ほたる袋うすむらさきに咲く庭にのぞみて冷たき
茶を戴きぬ
白檀の線香の香ただよいて寺庭深く流れてゆけり

● 池谷しげみ

流れるる楽曲に救はるる日もありてピアニストの
指のしめりなど思ふ
東京を追はれ横浜にのがれ来しからすたちに愛の
逃避行あれ
次の世のなにも見えねど草の種のらせんほどけて
ほわと飛びたつ

● 小島熱子

団地の坂のベンチに坐る老人はうつつのなべてを
放下せしごと
ただ広きシャルル・ドゴール空港に栗色のルージュ
買ひし日はるか
わが非在の夏もおなじく日の差して庭隅に蟻はう
ごきてをらむ

● 柴原明美

濃みどりの胡瓜きざめばつぎつぎと輪の生れゆけ
り 気を取り直す
胸元にピンタツクの服縫ひくれき少女のわれを知
る人逝けり
あへぎつつ上り来れる夫の墓に鈴ふることく老鶯
が鳴く

● 正古誠子

春日中群れなし進むのつべらぼう　スマホを向け
て桜を仰ぐ
革手袋外さずパンを歩き食ふ男を見たり若さ過ぎ
たる
桂稚木のこもれ陽さざめくときすぎて夏の緑は木
陰をつくる

● 鈴木和子

緑道の沙羅双樹はと見上げれば一本は枯れ花散ら
ぬ夏
展望室より見下ろす紫の横浜港子児らの瞳に平和
の瞬き
数年ぶりに逢いたる人と前置きの言葉は忘れ即
短歌の友

● 関口満津子

遠来の友を待ちつつ口遊ぶ「楽しからずや」「淋
しからずや」
亡き夫と曾孫の写真並べ置くこの世では相会はざ
る二人
亡き夫とこもごも語る明けの夢おぼろおぼろと遠
ざかりゆく

● 千田政子

浅草寺のほおずき市へ詣ればやつと会えたり
〈千成りほおずき〉
「一升枘」に四万六千粒の米が入る一生幸せとほ
うずき市に
あの疎開の母との思い出のほおずきが赤く灯りて
お盆となりぬ

● 長野道子

入院の日の楽しみに馬車道アイスクリンの小豆味
あり
わさび漬け食めばつーんと滲みくる涙　治療を終
えて四年目に
即興に装飾音を加え弾く寛解の魔法がとけません
ように

● 中村泰子

スマートフォン人の造りしものゆゑかタッチパネ
ルは私を拒む
辞書になきスマホ用語に戸惑ひぬ　圧縮　解凍
同期　紐つけ
おびただしき迷惑メール削除して今日一日の平安
なりし

● 間　ルリ

朝のひかり指先頬にやわらかし時間の悲鳴がテン
ポをあげる
三分の間に紅茶は色を出す英国のプライドを飲む
七月尽
低気圧の進路を示す予報士の拾う数値と捨てた予
測と

● 堀部知子

速達を持ち行く道に炎天下の百日紅は泰然と立つ
柿の木に葡萄がさがり共生のみほんのような庭の
一隅
冠雪の富士の見ゆるところまで歩を進めゆく　夏
の雨止む

● 林　静峰

マーガレット桃いろに笑み開きあるノースポール
の未だちぢみぬて
君子蘭真盛りなる花めぐり蟲のつがひが真昼間を
舞ふ
五いろの牡丹散り初めうす曇り鈴蘭小さき花を咲
かせる

特集2 新春歌会

——総会・歌会・懇親会

〔日時〕二〇一九年一月二十七日(日) 13:00～18:50

〔会場〕馬車道十番館(横浜市中区)

●新春歌会報告——河北笑子

年が明けて一ヶ月近く寒旱の日が続き、厳しい寒さと乾燥の一月二十七日例年通り馬車道十番館で新年会が行われた。総会に続き歌会に入る。三十一首の出詠歌のうち四名欠席で二十七首の歌を桜井健二氏の司会で始まった。私は最初の八首を担当。全部に言及する紙面がないので印象に残った歌についてのみ。

一首目の歌、「わが身つつむ新春の…」は初句の「わが」は不用で、「身をつつむ」と助詞の「を」を入れた方がいい。素直な歌。

二首目の「北斗星冴ゆる…」の歌は結句の「楽しみ待つ来る元号を」の「来る」を省いて「…楽しみて新しき元号を待つ」としたい。

三首目の歌の評者はしみじみと細やかな歌と評された。

五首目の歌の「美しい辺野古に基地はいりません…」の歌は時事詠だが不条理に対する沖繩の問題に対しては甘い。また「…いりません」語る吉永小百合凛として「語る」は省いて「…吉永小百合凛として言ふ」でいいのではないか。

いろいろ活発な意見が出たが全部に言及出来ないの
で、各評者の方々の発言を主に、私の意見も交えて報
告とさせていただきます。

●新春歌会報告——桜井健司

一月二十七日、馬車道十番館。定刻通りの午後二時より新春歌会は開始された。着席している順番に沿って一人ずつ批評し、数首進んだところで第二評者にパ
トンが渡され、まとめて批評するという流れで進められた。河北笑子、真鍋正男、藤田絹子、荻谷君代の四名が第二評者。司会は桜井健司。

みかん一つ手の平にのせ冬来たる屋根に霜おく今
日の寒よ 伊藤美枝

小さきが大きに勝つはたのしかり兎を投げし蛙が
笑ふ 藤田絹子

自動扉開けばふいに秋が来て平成終の紅葉散る
なり 河北笑子

裏道や抜け道ばかり選びつつ師走の街を駆け抜け
てゆく 真鍋正男

注目され、時間を費やし検討された作はいくつも

あったが、その内の四首を取り上げる。一首目は冬の
景を詠む。上句の主体は作者だろうか。下句では外の
景色に場面が転換する。それを一首に収めて寒の入り
を表現した。二首目は、鳥獣戯画を素材とする。絵巻
においてはどの動物も同じ大きさに描かれており、実
際とは異なる。しかし、内面的な景としてそこに詩的
な飛躍を見ることが可能かもしれない。三首目も、実
景かもしれないが心象風景にも映る。夏から秋、そし
て平成から次の元号へ。季節と時代の移ろいに対する
作者の思いがうかがえる。四首目は事実に基づいた作
と思われるが、そこに作者の生き様や軌跡を比喩的に
沿わせて読むことも可能で、短歌の奥行きや深さ、面
白さを再認識させられる。

全二十七首を鑑賞し意見を述べ合い、定刻通り午後
五時に終了。出詠数は決して多くはなかったものの、
解釈の多義性、語句の選び方、リズムの再考などに
ついて問題が提起され議論百出、充実した会であった。



懇親会の前にしっかり勉強です

・わが身つつむ新春の光ほの温し　この一年よ安らけ
くあれ
中村規子

・北斗星冴ゆる町空あおぎつつ楽しみて待つ来る元号
を
塚田キヌエ

・いつしかに母の齢も越えたりと秋の夜長を弟に文書
く
朝井恭子

・秒針に眼球ながる油照り、バスの尻見つつスマホに
書いた
後藤恵市

・「美しい辺野古に基地はいりません」語る吉永小百
合　凜として
田之口久司

・地ビールに陽の差し及びひさびさに集うは同期の顔
なじみの友
堀部知子

・吾が生業の原点なりし反射炉を葦山に訪ふ老いのす
さびに
松本嘉猷

・遊亀師より描けよと賜ひし大神楽根付きて師走の庭
に紅
半澤敏子



厳しく楽しい歌会です

・みかん一つ手の平にのせ冬来たる屋根に霜おく今日
の寒よ
伊藤美枝

・教科書を捧げ持ちつつ電車に揺るる女子高生は徹夜
の朝か
宮下俊博

・極月の風ふきゆけりちらちらと返り花咲く雪柳揺り
て
土屋美代子

・「天国への階段」を舞ふ宇野昌磨しなやかな影氷に
映し
竹内芳恵

・耳朶ふかく南海の悲歌を聴かまほし逆巻く渦の北上
すらし
津波古勝子

・朝日昇る美しき年この平安いつまでも続け我も世界
も
高橋律子

・小ささが大きに勝つはたのしかり兎を投げし蛙が笑
ふ
藤田絹子

・正月の真中に反りかえる鯛が腹のあたりに波を抱え
て
高橋みずほ

・夕暮れを紅葉葉のせて流れゆく川面の風にかすか波
立つ
葉山昌子

・翅立てて炎天下を蝶が引かれゆく蟻の速度で海への
道を
三枝むつみ

・ふたつの太陽ひとつは射られて月となる神話の月に
照らされてをり
荻谷君代

・道の辺に色添へくれし山茶花に幼き頃の唱歌浮かび
来ぬ
下田聡子

・医師より身体機能の低下など告げられており冬の入
り口
桜井健司

・母は曾孫に百人一首を教へたり　二人の幼に伝へゆ
きたし
長谷川静枝

・自動扉開けばふいに秋が来て平成終の紅葉散るなり
河北笑子

・押しやりし燈籠揺れてゆく川面妹のような満月が照
る
深志聖子

・元朝の仏間にさし入る一条の日ざしにゆらぐ香煙清
し
山下成代

・ふるさとの長崎街道歩まむと長く思うも茅花咲くこ
ろを
佐久間佐紀

・金色の雲のつばさをかかげたる大富士くれゆく山中
湖村
山田道恵

・年越しは最期ならむと病む兄の刷りし暦ぞ雪中桜花
野一色容子

・ひとにいうことではないがほんとうに鯨のような雲
を見たんだ
吉野裕之

・方形に従ふ水もやさしさも形をもたず　おもひはか
へる
正吉誠子

・裏道や抜け道ばかり選びつつ師走の街を駆け抜けて
ゆく
真鍋正男

* 横浜歌人会ホームページのご案内

横浜歌人会のホームページでは、会の紹介や
催し物の報告など、いろいろな情報を掲載し
ています。ぜひアクセスしてください。
<http://yokohama-kan.coocan.jp/>

* 「横浜歌人会会報」第二〇〇号のご紹介

二〇一一年二月に発行された会報第一〇〇号
では、特集として、歌人として長く活躍して
こられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお
話をうかがいました。A4判44ページの充実
した一冊です。
会報はホームページからダウンロードができ
ます。

■ 会員作品

● 山田道恵

朝明けの窓にしちかく薄墨の富士山全容あらはれ
にけり
たちまちに雲わきあがり富士ヶ嶺の頂きかくす昼
ちかみかも
金色の雲のつばさをかかげたる大富士暮れゆく山
中湖村

● 結城千賀子

傘を打つ雨と雨音みづからの小さき界を人は持ち
ゆく
榎紐の朱の色はさみ伝記閉つ苦しき恋の章で今宵
は
かたつむり哀しみの殻負ふなれば涙痕のごときを
曳けりひとすぢ

● 山下成代

沈黙をする背にひきよう者の声 夜の紫陽花しと
どに濡れる
人けなき鎌倉石の参道の角の丸みや四葩のしなう
おのがじし詠みゆかん七月を白き細月真澄の空に

● 吉野裕之

あかねさす／ぬばたまのアメリカ坂を下りてくる
あなたに会って秋がはじまる
地下鉄の入り口にいて鳴いている猫とも思う少女
とも思う
気づいたという顔をしてこの男ダブルノットによ
うにほほえむ

● 渡辺 謙

詣できて丘に立てれば亡き妻と富士を仰ぎし日を
思ひ出づ
峻烈寒き生月近づきてわが身清まりゆく思ひあり
妻逝きて二年経しかど唐突に悲しみもどる耐へが
たきまで

編集後記

・ 昨年の観月会は平成30年10月21日に東天紅横
浜桜木町ワシントンホテル店にて開催されま
した。詠草参加は31名でした。
・ 本年の新春歌会・総会は平成31年1月27日に恒
例の馬車道十番館にて開催されました。詠草
参加は31名でした。
・ 会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10
首と説明文(23字×28行)を左記事務局・後
藤あてお送りください。会報に掲載させて頂
きます。

(K・G)

横浜歌人会会報第二二〇号

発行日 二〇一九年十月二十日
編集人 後藤 恵市
発行人 吉野 裕之
発行所 横浜歌人会
URL <http://yokohama-kk.art.cocacn.jp/>
振替口座 00230-0-52137 (名義横浜歌人会)
制作アトリエ云／印刷啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付
の内容が印刷版のものとは異なります。